

否定コピュラ文の補語位置に現れる any N

— John is not any doctor. —

西村 香奈絵

Any N as a Copula Complement in Negative Sentences:

John is not any doctor

Kanae NISHIMURA

In negative sentences, indefinite noun phrases can be replaced with *any N* without changing the meaning unless they appear in the subject position. For example, the sentences *I don't have a cat* and *I don't have any cat* convey the same meaning that there is no cat that "I" have. When *any N* is used as a copula complement, this type of a paraphrase will no longer be available. The sentences *John is not a doctor* and *John is not any doctor* do not have the same meaning unlike the first pair of sentences. The latter with *any doctor* has the interpretation that John is a special doctor, which does not deny that John is a doctor. It is not obvious how this construal is available. In this paper, we show that when contrastive negation operates on *any*, the focus is on the distinctive semantic feature of *any*, called "widening." The inverse effect of contrastive negation gives rise to a "narrowing-down" of domains of individuals. This yields the semantic representation of the sentence in question, which says that in every smaller, or more central, domain of individuals than the one given from the context, there is an individual called John who is a doctor. This semantic representation makes it possible for the sentence to have the interpretation that John is a special doctor.

1 はじめに

英語の不定名詞句 (eg. a dog, dogs) は、それを含む文が否定されると、そのままの形が保持されるか、あるいは「any」が付加される。

- (1) a. John has {a cat/ cats}.
 b. John does not have {a cat/ cats}.
 c. John does not have any {cat/ cats}.

(1) b, c は、いずれも (1) a を否定する文であり、共に「ジョンは車を一台も持っていない」という意味を表す。しかし、これらの不定名詞句がコピュラ文の補語として現れる場合にはこの関係は成立しない。

- (2) a. John is a doctor.
 b. John is not a doctor.
 「ジョンは、医者ではない」
 c. John is not any doctor.
 「ジョンは、ただの医者ではない」

(1) の場合と同様に、(2)b, c は (2)a の述語に否定をかけたもので、不定冠詞をそのまま保つか ((2)b)、それを any に代えるか ((2)c) の違いを持つだけである。しかし、(1)b, c とは異なり、(2)b, c は同じ意味を表さない。(2)c は、(2)a の表す命題を否定する文ではない。(2)b は、「ジョンは、医者ではない (= 医者以外の職業だ)」という解釈を持ち、(2)a の内容を否定する。それに対し、(2)c は「ジョンは、

ただの医者ではない（特別な医者だ）」という解釈を持つ¹。この解釈では、ジョンは医者であることに違いないので、(2)aは否定されていないことになる。この(2)cで生じる特殊な解釈は、どのようにして得られるのか。これが本稿で取り組む問題である。

(2)cが持つ解釈には三つの問題が含まれる。

- (3) (i) この any は、否定極性 (Negative Polarity) any なのか、自由選択 (Free Choice) any なのか。
 (ii) この any は、全称量化の意味解釈を持つのか、存在量化の意味解釈を持つのか。あるいは第三の意味解釈を持つのか。
 (iii) この否定文で、問題となる否定の種類は何か。

これら三点は、決して自明の問題ではない。本論文では、上の三つの問題に対して、次のような答えを与える。その上で、なぜ(2)cで見られるような解釈が生じるのかを明らかにする。

- (4) (i) (2)cの any は、否定極性 any か自由選択 any かを厳密には判別できない。
 (ii) (2)cの any は、不定名詞句の意味に加え領域拡張の意味を持つ。これにより、存在量化と全称量化の意味を兼ね備える。
 (iii) (2)cの否定文の否定は、対照的否定である。

本稿では、Kratzer & Shimoyama (2002) 等に従い、any は基本的には不定名詞句と同様の意味をもつが、加えて、領域拡張 (widening) という意味効果を持つことにより、any の特殊性が引き出されると考える。領域拡張は、Kadmon & Landman (1993) により提出され

た概念であり、本稿でもこれを採用する。(2)cで、対照的否定が any にかかるると、この領域拡張の意味が否定される。対照的否定は、文全体を否定するのではなく、文中の特定の要素だけを否定する否定である。対照的否定がある要素にかかるると、その要素が持つ属性のうち一部分は前提として保持され、残りの属性だけが否定の対象となる。any に対照的否定がかかると、領域拡張に関わる意味だけが否定される。領域拡張は、名詞の外延を広げる効果のことであるが、その時、外延は、その名詞の指示対象の中で、核となる属性を持つ個体から、周辺の事例となる個体へと外延が広がっていく。この領域拡張が否定されることにより、領域縮小が起こる場合には、より周辺の事例からより中核的事例へと領域が狭められていく。これが(2)cの特殊な意味を生じさせることを主張する。

2 not any N の観察

2.1 否定極性 (Negative Polarity) any か、自由選択 (Free Choice) any か

2.1.1 any の二つの意味解釈：否定極性 any と自由選択 any

any には、否定極性項目としての用法と、自由選択項目としての用法の二つがある。

- (5) 否定極性 any
 a. I don't have **any** cat.
 b. I doubt if he gives **any** present to her on St. Valentine's Day.
 c. The country must be united before **any** election.
 d. If you have **any** question, please let me know.
- (6) 自由選択 any
 a. **Any** alcohol affects a baby adversely.
 b. This technology is new to **any** country.
 c. This printer prints **any** document.

¹ Carlos Ramirez 氏 (近畿大学総合社会学部) によると、「John is not any doctor.」は、「ジョンは医者ではない」という意味を持つ可能性がないことはないが、その場合には非常に特殊な文脈が必要であり、通常は、「ジョンはただの医者ではない」という解釈が与えられるということである。

(Menéndez-Benito 2010: 58)

否定極性 any は、否定文を中心に、否定的意味を持つ、動詞 (doubt 等)、接続詞 (if, before 等)、形容詞 (difficult 等)、副詞 (hardly)、比較構文の than 内等、否定極性文脈と呼ばれる環境にのみ生起することが知られている。意味は、名詞の表すものの存在が問題になるのが特徴で、不定名詞句で置き換えが可能である。

- (5)'a. I don't have **a** cat.
 b. I doubt if he gives **a** present to her on St. Valentine's Day.
 c. The country must be united before **an** election.
 d. If you have **a** question, please let me know.

それに対して、自由選択 any は、全称量化の意味を持つことが特徴で、every のような全称量化表現と置き換えが可能である。

- (6)'a. **Every** alcohol affects a baby adversely.
 b. This technology is new to **every** country.
 c. This printer prints **every** (kind of) document.

自由選択 any は、総称文脈 ((6)a, b) 等で見られるなど異なる分布を示し、否定極性 any とは異なる。自由選択 any が分布する環境をまとめると、次のようになる (Dayal 1998, 2009)。「*」は非文であることを示す。

- (7) 総称文、*習慣文 (偶発的全称量化文)
 a. Any owl hunts mice.
 b. *Any of these owls hunts mice.
 (8) 可能性モーダル、*必然性モーダル、*モーダル文脈外 (エピソード)

- a. Bill may read {any books/ any of these books}.
 b. *Bill must read {any books/ any of these books}.
 c. *Bill read any book.

- (9) 後置修飾あり (subtriggering)、*後置修飾なし
 a. *John talked to any woman.
 b. John talked to any woman who came up to him.
 c. Bill must read any books {he finds/ on his reading list} (cf. (8)b)

- (10) 命令文
 a. (To continue), press any key/ any of these keys.
 b. Pick any card. (Horn 2000: 170)

- (11) not (just) any
 a. Bill didn't read (just) any book, he read *Remembrance of Things Past*. (Dayal 2009: Sec.7)
 b. CALL FOR PAPERS
 But not just any papers, papers on KLINGON! (Horn 2000: 177)
 c. Help! You know I need somebody. Help! Not just anybody. (John Lennon and Paul McCartney, 'Help', in Horn 2000: 185)
 d. He didn't see just anyone – he saw ... Stan Papi! (Carlson 1981: 22)

この内、(7)、(8)、(9) の環境で用いられる any は、存在量化表現ではなく全称量化表現で書き換えが可能であり、否定極性 any とははっきりと異なる解釈を持つことが分かる。

- (7)' (7)a = a. Every owl hunts mice.
 (8)' (8)a = Bill may read {all the books/ every book}.
 (9)' (9)b = John talked to every woman

who came up to him.

- (9)c = Bill must read every book {he finds/ on his reading list}

しかし、(10)、(11)に現れる any Nは every Nで置きかえることができない。(10)は、不定名詞句で置きかえることができ、(11)ではどちらの置き変えも同じ意味を表さなくなる。「#」は、表現としては可能であるが、対応する表現と同等の意味を表さないあるいは不自然であることを示す。

- (10)' a. (To continue), press {#every/ a} key.

b. Pick {#every/ a} card.

- (11)' a. #Bill didn't read (just) some book, he read *Remembrance of Things Past*.

b. CALL FOR PAPERS

But not just { #every/ #some} paper(s), papers on KLINGON!Help!

c. You know I need somebody. Help! Not just {#everybody/ #somebody}.

d. He didn't see just {#everybody/ #somebody} - he saw ... Stan Papi!

書き換えテストを見る限りでは、(10)で現れる any は、否定極性 any との共通性を示す。(11)に至っては、書き換えテストが通用せず、いずれのタイプの any にも当てはまらない可能性さえ示唆される。(10)の any に関しては、命令文の形はしているが、意味は、「どのキーを押してもよい」、「どのカードをとってもよい」という許可を伝える文であり (Dayal 1998)、(8)タイプと同系と考えることができる。よって、通常、自由選択 any として扱われる。(11)タイプの any も、自由選択 any として扱われることが多いが、否定極性 any とする研究者もいる。本論文で問題としている any は、(11)タイプと思われる。よって、次節では(11)タイプの any をさらに観察し、これが自由選択 any とも、否定極性項目とも

はっきりとは判別できないことを示す。

2.1.2 自由選択 any か否定極性 any か

例文(11)で見たような“not (just) any”タイプの any は、just を伴う事が多いが、伴わなくても同じ意味を表す。また、他に次のような特徴を持つことが知られている。

- (12) a. 否定文で用いられる。

b. 上昇調のイントネーションを伴う。

(12)aについては、辞書の記述にも見られる。

- (13) a. ((否定)) 普通の, ただの (⇔ special)

『ランダムハウス英和大辞典』(第2版)

b. [部分否定で; 特に just ~として] どんな…でも (…というわけではない), ただ [並み] の…(とはいかない).

『新英和大辞典 第6版』

c. [否定文で; just (…)- (old), 時に ~ ordinary] ありふれた, ただの, 並みの 『ジーニアス英和大辞典』

また、同じ特性を示すものとして、次のような観察も報告されている。

- (14) a. ?Just anyone can come (to the meeting, the party, etc.)

(cf. Anyone can come. は OK)

b. Not just anyone can come.

(Horn 2000: 171)²

否定文で自然に使用されるというこの特徴は、

² ただし、Horn(2000)は、not (just) any が否定文中で用いられることを示す例として、これらの例を挙げているわけではない。Horn(2000)では、この例に続き次の例文も掲載されている。

- (i) Just anyone can't come. (Horn 2000: 171)

本稿で後に述べるように、否定は主語を作用域にとらないので、この文では anyone は否定文で用いられてはいても、否定の作用域に入るわけではない。

否定極性項目と通じる。実際、Carlson (1981) は、(2)c や (11) のように、全称量化表現である every と置きかえることができない any は、否定極性項目であると考えた。

- (2)c' John is not any doctor.
 ≠ John is not every doctor.

Carlson によると、自由選択 any とは全称量化力を持つ表現である。全称量化力を持たない (2)c の any は、自由選択項目ではないということになる。

では、not (just) any の any は否定極性項目かという、そうとも言えない。(11)' で見たように、このタイプの any は、否定極性項目では可能である不定名詞句での置き換えができない。さらに、just の any への付加が可能であることは、その any が自由選択の意味を持つことのテストと見なされてきた。否定極性と自由選択の意味の違いを分ける方法として知られているものに、almost や absolutely で修飾が可能か否かをみる方法がある。それと同様の振る舞いをするものとして just も並行的に用いられてきた。

- (15) a. He doesn't have {*/almost/
 *absolutely / *just} any cats.
 b. Bill talks to {almost/ absolutely/
 just} any woman he sees³.

また、not (just) any は、否定極性文脈でなくとも観察される。

- (16) a. Just anyone won't do for this job.
 (Ladusaw 1979: 105)
 b. Just any student couldn't solve this problem. (Ladusaw 1979: 105)

これらの二つの文は否定文であるが、否定は主

語には及ばない。よって否定文主語位置は、否定極性文脈を形成しない⁴。しかし、not (just) any と同タイプの any は用いられている。従って、否定極性項目の特性を満たさないことが分かる。

では、not (just) any の any は、自由選択 any なのだろうか。just と absolutely は、おおむね自由選択 any を修飾することができ、ほぼ同じ振る舞いをするを先に述べた。確かに、(16)a, b と同じ文脈では、absolutely は出現可能である。

- (17) Absolutely anyone can come. (Horn 2000: 171)⁵

しかし、Horn(2000) は、本稿で扱う not just any タイプの any は、absolutely で修飾することができないことを指摘する。つまり、自由選択 any を識別する absolutely テストに合格しない。

- (i) It's not {just/ #absolutely} ANY game, it's the game. Horn (2000:171)

これは、not (just) any N が全称量化の意味を含んでいないことを意味する。従って、全称量化表現であることを自由選択 any の本質的特性とみなすならば、not (just) any の any は自由選択項目ではないということになる。

しかし、全称量化表現での書き換えが any の二つの用法を分ける絶対的な方法とは見なせないということも、一方では確認できる。(10) 及び (10)' で見た通り、自由選択 any と見なされていても全称量化表現での書き換えができない例もある。さらに次の例が示すように、全称量化の意味を含んでいなければ、その any は否定極性項目であるとする捉え方にも完全な妥

⁴ 否定極性 any は否定文主語には表れない。

(i) * Anyone didn't come.

⁵ ただし、(14)a で容認度が下がることから、absolutely と just が全く同じ振る舞いをするわけではない。

³ ネイティブチェックは Carlos Ramirez 氏 (近畿大学総合社会学部) にお願した。ただし、誤解等に基づく誤りの責任は筆者にある。

当性は与えられない。(18)は、全称量化表現にしかつけられない but N (「N以外」)を、自由選択 any にはもちろん、否定極性 any にもつけることができることを示している。つまり、否定極性 any も全称量化表現が持つ特性を共有している部分がある。

- (18) a. I'll vote for anyone but Bill. (自由選択 any)
 b. I wouldn't vote for anyone but Bill. (否定極性 any) (Horn 2000: 166)

以上のことから、not (just) any の any は、全称量化表現ではないが、だからと言って自由選択項目であるとも言えないということが分かる。

not (just) any が否定極性項目と自由選択項目それぞれと共有する特性をまとめると、次のようになる。

(19) not (just) any の持つ特性

否定極性項目としての特性	自由選択項目としての特性
<ul style="list-style-type: none"> ・主に否定文中で用いられる。 ・全称量化表現との書き換えができない。 ・absolutely テストに合格しない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・否定極性文脈以外でも出現する。 ・不定名詞句との置き換えができない。 ・just は、通常、否定極性項目の修飾はできず、自由選択項目は修飾できる。

本稿で扱う not-just-any は、否定極性 any であるとも、自由選択 any であるとも言え、逆に、ないとも言える。二つの異なる解釈を持つ any を、多義的とするか単義的とするかで異なる提案がなされている。しかし、最近の研究では、any は二つの異なる用法を持つが、同じ一つの意味から派生的に得られるものだとする単義説を主張するものが多い。この考え方をとれば、いずれの用法であるのかを分ける意味は薄れていくことになる。ここでの考察は、

not (just) any が否定極性項目と自由選択項目との中間的特性を示す事例とみなせることを示す。これは、any が異なる用法を持ちながらも、一つの同じ意味を持つ語彙であるという仮説を支持すると言える。

2.2 全称量化表現か、存在量化表現か

2.2.1 全称量化表現として自由選択 any

Carlson (1981) や Dayal (2009) のように、any N が自由選択と否定極性の解釈を持つのは、any が多義的であるためであるとも考えることもできる。しかし、多くの研究者は、any は単義的であり、不定名詞句としての意味を基本に持ち、それに加えて持つ any 特有の意味効果と、使用される環境の影響により様々な解釈を持ち得ると主張し、統一的分析を与えることを試みている。ここでは、まず any を多義的であるという想定から出発し、自由選択 any に全称量化表現として分析する Dayal (2009) を概観する。続いて、Kadmon & Landman (1993)、Kratzer & Shimoyama (2002) に基盤を置く不定名詞句としての単義分析を検討する。本稿では、後者を支持する。

Dayal (2009) は any を否定極性 any と自由選択 any が異なる振る舞いをするという想定に立ち、自由選択 any には全称量化を含む次の分析案を提案した。

$$\begin{aligned}
 (20) \quad [[\text{Any}]] &= \lambda P \lambda Q \lambda Z \lambda w [\\
 &\forall x [P(w)(x) \rightarrow Z \lambda w' Q(w')(x)] \& \\
 &\quad \dots \text{前半部分} \\
 &\neg \exists X \forall w' w \leq w' \lambda x [P(w')(x) \& \\
 &\quad Q(x')(x)] = X] \quad \dots \text{後半部分}
 \end{aligned}$$

前半部分は、any が全称量化表現であることを示し、後半部分は数が確実に定まらないこと (indeterminacy, fluctuation) を表す。この後半部分が、自由選択 any の複雑な分布をよく捉える。自由選択 any が総称文では出現可能であるが、習慣文で出現不可能であることも ((7))、必然性モーダル内やモーダル文脈外で自由選択 any が出現できないことも ((8))、

後置修飾がなければ自由選択 any が出現できないことも (9)、全て後半部分の条件が満たされないことで説明される⁶。命令文 (10) は、可能性モダル内で自由選択 any が認可されることと平行的に説明される。従って、本稿で問題にしている (11) の not (just) any タイプを除き、全ての自由選択 any の分布が説明できる。

問題は、Dayal 自身も認めるように、ここで問題にしている not (just) any の意味解釈と分布制約は捉えられないことである。not (just) any は全称量化の意味を持たないため、(2)c のような文には Dayal の分析は適用できない。Dayal に従うと、(2)c に対応する肯定文には、次のような意味表示が与えられると思われる。

- (21) [[John is not any doctor]]
 $= \neg_{\text{meta-neg}} \forall x [x \leq_{w_a} \iota y [\text{doctor}'$
 $(w_a)(x) \rightarrow [\text{be}'(w_a)(x)(j)] \& \neg \exists X$
 $\forall w' w_a \leq w' \lambda x [\text{doctor}' (w')(x) \&$
 $\text{be}'(w')(x)(j)] = X$

「John is any doctor.」は、 w_a (発話文脈) における全ての医者がジョンであるという不適切な意味を表すことになる。さらに、 w_a における全ての医者の集合は、変動しないため、数が定まらないことを述べる式の後半部分と矛盾する。これは、この文が不自然であることと合致する。これに対し、否定文は成立する。この否定文が表す解釈は、会話の含意とそれを否定するメタ言語否定から得られると、Dayal は述べている。Dayal は、述語が成り立つために最も標準的な個体が any N の指示対象として選ばれるという会話の含意があると想定する。

⁶ 例えば、「John must read any book.」が容認されないことは次のように説明される。any book は、あらゆる可能世界において、その世界に含まれるすべての本をジョンが読むこととなり、ジョンが読む本の集合の数が定まってしまう。これが、集合の規模が定まらないことを要求する any の意味と矛盾する。

そして、この会話の含意にメタ言語否定がかかり、それが否定されることにより、特別な N であるという意味が生じるのではないかと言う。しかし、なぜ any N 名詞句の指示対象として、述語が成り立つ最も標準的な個体を選ばれるのかが明らかでない。特に、現在でも有効であるものとして援用されることが多い領域拡張 (widening, Kadmon & Landman 1993) の概念と矛盾する。「Any owl hunts mice.」の文でも、同様の会話の含意が成立するなら、ネズミをとるという述語が成り立つ最も標準的なフクロウの個体が any の指示対象だということになるが、これは事実と合致しない。この総称文は、この述語が成り立ちにくいと想定される最も「非」標準的なフクロウにも、その述語が成り立つことを述べると理解される。もし総称文のようなモダル文脈ではこの会話の含意は成立せず、エピソード文でのみ成り立つと考えるのなら、その動機がはっきりしない。

Dayal のように、自由選択 any が個体の全称量化を含む表現であるとする分析では、全称量化表現としての特性を持たない not (just) any の解釈を捉えることは極めて困難であると言える。

2.2.2 不定名詞句の意味から自由選択 any を導く

様々な文脈における振る舞いを観察してみると、否定極性 any と自由選択 any の意味解釈は連続的であるという見方ができる。2.1.2 節では、not (just) any の any が否定極性としての特性も、自由選択 any としての特性も、どちらも不完全にしか持たないことを見た。Kadmon & Landman (1993) は、現在でも広く用いられる (Kratzer & Shimoyama 2002, Chierchia 2006 等) 概念「領域拡張 (domain widening)」を提案し、不定名詞句はこの効果を持つ不定名詞句であると分析した。Carlson (1981)、Dayal (1998, 2009) 等が自由選択 any に全称量化表現としての分析を与えるのに対して、Kadmon & Landman (1993)、Kratzer & Shimoyama (2002)、Chierchia (2006)、

Rooij (2008) 等は、any に、統一的に不定名詞句と同様の意味を与える。そして、widening (Kadmon and Landman 1993) という any が持つ意味効果が any の様々な特異性を生み出していると主張する。ここでは、any を不定名詞句として分析するに際してキーワードとなる「領域拡張」について概観する。

Kadmon & Landman (1993) は、否定極性 any だけでなく、自由選択 any にも不定名詞句と同じ分析をあてはめ、全称量化表現としては扱わない。Kadmon & Landman は、自由選択 any が、全称量化の解釈を持つのは総称文脈においてのみであるとし、any の特殊性は領域拡張にあると主張した。領域拡張とは、文脈で与えられた量化領域を広げる効果のことである。不定名詞句主語の総称文と、any N 主語の総称文を比較してみる。

(22) An owl hunts mice.

(23) Any owl hunts mice.

病気のフクロウがネズミを狩らないことは、(22) と (23) のいずれの総称文にとっても反例とはならない。異なるのは、(22) では、病気のフクロウには「ネズミをとる」という述語はあてはまらないと理解されるのに対して、(23) では、病気のフクロウにもその述語があてはまると理解される点である。つまり、ねずみをとらない病気フクロウは (22) では例外であるのに対して、(23) では例外とはみなされない。これが領域拡張である。any がなければ、ネズミをとらない病気のフクロウは例外となる。any は、病気のフクロウもフクロウに数えられるように領域を拡大させる。これにより、「たとえ病気のふくろうでもふくろうであれば、ねずみを狩るものだ」という解釈を与える。ただし、この領域拡張は、単に普通名詞の外延を最大に広げるのではなく、文脈で与えられた方向に沿って、ある対象をその外延に加える。(23) の any は、あらゆる方向に外延を広げるのではなく、例えば、病気—健康という尺度に沿って広げられる。

Kadmon & Landman (1993) によると、このような領域拡張は、自由選択 any だけでなく否定極性 any にもあてはまる。例えば、次の二文を比べると、「any potatoes」文の方が「 ϕ potatoes」文より、存在否定されるジャガイモの領域が広い。

(24) I don't have potatoes.

(25) I don't have any potatoes.

不定複数名詞句を含む (24) は、腐ったジャガイモを私が持っても、真として受け入れることが可能である。それに対して、(25) は、腐ったジャガイモであっても私は持っていないということを含意する。領域拡張は、自由選択 any だけでなく、否定極性 any もが共有する any の意味特性である。

Kadmon and Landman は、「領域拡張」に加えて、「命題強化 (strengthening)」を any 認可の条件として導入した。これに従うと、any の使用が認可されるのは、any の引きだす領域拡張がより強い言明を生み出す場合に限られる。例えば、(23) で領域拡張が行われることで得られる言明「病気のフクロウも含めどんなフクロウもネズミをとる」は、領域拡張が行われない場合に得られる言明「フクロウはネズミをとる」よりも強い。つまり、命題強化の制約が満たされている。よって、(23) で any の使用が認可されている。同様に、(25) も、領域拡張が行われることにより、より強い言明が作り出されている。すなわち、「ジャガイモを持っていない」という言明よりも強い言明「腐ったジャガイモも含めどんなジャガイモも持ってない」が生み出されている。これにより、(25) で any の使用が可能となる。

Dayal (2009) が提案するように、自由選択 any を全称量化表現とすると、2.2.1 節で見たように、全称量化解釈を持たない (2)c タイプの any の意味を捉えることができない。そこで、Kratzer & Shimoyama (2002) や Chierchia (2006) の自由選択項目の分析でも重要な概念として用いられている Kadmon

& Landman (1993) で提案された領域拡張を、本稿でも採用する。そして、any の意味は、不定名詞句の意味に widening の意味が加わったものとして分析する。

2.3 文否定か、対照的否定か

否定は多義的であると言われる。様々な基準による様々な呼び名があるが、ここでは文否定と対照的否定という用語を用い、次のように区別する。

- (26) a. 文否定：文の表す命題全体を否定し、特定の要素だけに否定がかかるのではない否定
 b. 対照的否定：特定の要素だけに否定がかかる。

この区別は、Horn (2001) の descriptive/metalinguistic negation の分類に準じる。Horn の「メタ言語否定」という用語は、前提、会話の含意、表現の使用法、発音の仕方等を否定する点を明示的に示したという意味で効果的な名称であるが、ここではそのタイプの否定は関係しないので、より一般的に用いられる対照的否定という語を用いる。対照的否定は要素否定とも呼ばれる。

- (27) I didn't meet Susan yesterday.
 a. [文否定] 私は昨日スーザンに会わなかった。
 b. [対照的否定] 私は昨日スーザンに会ったのではない。(ジェシカに会ったのだ。)

対照的否定は文の中の特定の要素だけを否定し、次のような書き換えが可能である。

- (27)' b. It is not Susan that I saw yesterday.

Dayal (2009) は、(2)c タイプの文にかかる否定はメタ言語否定であると述べている。メタ言語否定をどのような否定であると考えるのか

について明らかには述べていないが、ここでいう対照的否定にあたるものであろうと思われる。実際、(2)c の文も (27)' のような書き換えが可能である。

- (28) John is not any doctor (, but a special doctor).
 ⇒ It is not (just) any doctor that John is.⁷

ゆえに、(2)c に含まれる否定は、対照的否定であると考えられる。一方、(27)' では否定が Susan にかかっていることは明らかであるが、(28) では any doctor は二語で構成されており、いずれに否定がかかるのかは (28) の書き換えでも明らかではない。しかしここでは、対照否定は doctor ではなく、any のみにかかっていると思われる。このことは、他の名詞句の場合と比較してみると納得できる。

- (29) a. Lisa doesn't have three children (, but two).
 b. It is not three children that Lisa has.
 (30) a. Lisa didn't read many books (but only a couple of books).
 b. It is not many books that Lisa read.

これらの文においても、それぞれ b の書き換えにおいて、否定は three children, many books にかかるが、実際には children や books は否定されない。このような場合に、名詞述語に否定が及ぶのは、名詞に強勢が置かれる場合に限られる。

- (31) I don't want two DOGS (,but two CATS).
 = It is not two DOGS that I want.

⁷ ネイティブチェックは Carlos Ramirez 氏 (近畿大学総合社会学部) にお願した。ただし、誤解等に基づく誤りの責任は筆者にある。

対照的否定には、その要素を強調するイントネーションや、語彙による焦点化が伴うが、この点も (2)c タイプの否定の特徴と合致する。(2)c タイプの否定は、「not (just) any」と呼ばれることがあることから分かるように、just の付加やイントネーションによる any の強調が認められる。以上の考察から、(2)c に含まれる否定は、any への対照的否定であることが分かる。

2節では、any N は不定名詞句の意味を持ち、かつ領域拡張を行う名詞句として扱うことが妥当であることを見た。さらに、(2)c の否定文では、特に any に対照的否定がかかっていることを示した。次節では、これらを踏まえると、(2)c の意味が自然に導かれることを見る。

3 提案

3.1 a N コピュラ文と any N コピュラ文

本論文では、Kadmon & Landman (1993) や Kratzer & Shimoyama (2002) にならい、自由選択 any は不定名詞句の意味に、領域拡張 (widening) の働きを加えて持つものとして分析する。不定名詞句の意味は、次のように定義する。領域拡張は、単純に、不定名詞句により導入される x が選ばれる個体領域が拡張するものとして表す。

$$(32) \quad [[a \text{ doctor}]] = \lambda P \lambda x \in D_0 [\text{doctor}(x) \& P(x)]$$

$$(33) \quad [[any \text{ doctor}]] = \lambda P \lambda x \forall D' [x \in D_0 \& D_0 \subseteq D'] [\text{doctor}(x) \& x \in D' \& P(x)]$$

D_0 は、発話文脈において想定される個体領域を表す。(2)a, b には次のような意味表示が与えられる。

$$(34) \quad (2) \text{ a. John is a doctor.} \\ [[\text{John is a doctor}]] = \text{doctor}(j) \\ \text{ただし } j \in D_1$$

$$(35) \quad (2) \text{ b. John is not a doctor.} \\ [[\text{John is not a doctor}]] = \neg \text{doctor}(j)$$

ただし $j \in D_1$

(2) c. に意味表示を与えるに先立ち、まず、否定のかからない次の文の意味表示を見てみる。

$$(36) \quad \text{John is any doctor.} \\ [[\text{John is any doctor}]] \\ = \forall D' [j \in D_0 \& D_0 \subseteq D'] [\text{doctor}(j) \& j \in D']$$

この文は不適切であるが、与えられる意味表示もそのことを的確に捉えている。(36) は、「発話状況で与えられる個体領域を含むより大きな個体領域 D' 全てにおいて、医者でありかつそれがジョンであるような D' の成員 x が存在する」ことを意味する。これは、 D_0 においてジョンが医者であるならば、常に成り立つ。なぜなら、 D' が D_0 を含んでいるなら、あらゆる D' の中に、医者であるジョンが含まれるからである。従って、(36) は (34) を含意し、(34) も (36) を含意する。この場合、情報量が等しいにもかかわらず、わざわざ any のような複雑な意味計算を必要とする限定詞を用いていることが、(36) の言語表現を不適切なものにしていると考えられる。情報量の大小は、命題の含意関係によって定義される。一般に、命題 P と Q において、 $P \rightarrow Q$ が成り立ちかつ $P=Q$ でないなら、 P の方が Q より強い命題である。より強い命題が、ここでいう情報量の多い命題である。一方、言語表現としての単純さを比較すると、不定冠詞が付された名詞より any が付された名詞の方が、複雑な表現と複雑な意味計算を要求する。従って、(36) は人間言語の経済性の原理に違反する。同様の考え方は、Kadmon & Landman (1993) においては、命題強化 (strengthening) の制約によって提案されている。Kadmon & Landman は、領域拡張により命題が強化されない場合には、any の使用は認可されないと規定した。命題の強化は、ここでいう情報量の多さと対応し、同じように、命題間の含意関係により定義される。(36) は、(34) の命題より強い命題を与えない

ので、any の使用は認可されない⁸。

3.2 対照的否定

ここでは(2)cに意味表示を与えていくが、それにあたり、この文が含む対照的否定の特徴について見ておきたい。対照的否定は、文中の特定の要素のみを否定し、しかも、その要素の持つ一部の意味素性のみを否定する。例えば、次の文を考えてみる。

(37) This is not_{contrastive} a dog.

この文は、a dog に対照的否定がかかる文である。しかし、否定は「犬」という名詞述語全体を否定しているわけではない。例えば、「犬」が持つ、「動物」という意味素性は否定しない。このことは、この文が生み出すとされる対照的集合の要素を見てみると確認できる。この文を聞くと、特殊な文脈が与えられていない限り、聞き手は、例えば、「これが犬でないなら、猫か、狐か、狸か、兎か…」と推論を働かせる。犬の代わりとして、「猫」や「狐」ではなく、「惑星」や「お茶」、「バジャマ」、「クリスマスカード」等の可能性を考えることは、特殊な文脈がない限りは不自然である。ここで犬の対立候補としてあげられる{猫、狐、狸、兎…}⁹が(37)の対照的否定が作る対照的集合である。この集合の成員を見てみると、共通した意味素性が挙げられる。「動物である」、「四足動物である」、「毛が生えている」等である。これらの意味素性を持つ対立候補が挙げられるということは、これらの意味素性は否定されていないことを示している。ここで否定されているのは、これらの意味を共有する集合の間で、犬を他の動物から区別する弁別素性だけである。それを

⁸ Kadmon & Landman (1993) は、単に経済的でない、あるいは情報が十分でないことが会話の原則(グライスの量の公理)に違反するとするだけでは、通常の肯定文で any が認可されないことを説明するには弱すぎると考え、strengthening という制約を導入した。ここでは、any の不認可に関しては、深く踏み込む必要はないので、この点に関する選択肢の妥当性を議論することはしない。

仮に [+ 犬] とすると、次のようなイメージである。

(38) 「犬」にかかる対照的否定 対立候補

¬ [+ 犬]	[+ 猫]/[+ 兎]/ [+ 狐]…
[動物である]	[動物である]
[四足動物である]	[四足動物である]
[毛が生えている]	[毛が生えている]
…	…

このように、対照的否定は、否定がかかる要素の弁別素性だけを否定する。これにより、その意味素性のみを対立点とする要素の集合として対照的集合が形成される。

対照的否定が any にかかった場合に、否定が及ぶのは、any にのみ特徴的な弁別素性ということになる。そして、それは「領域拡張」であると考えられる。領域拡張に関わる部分は次の(i)～(iii)の三点である。

(39) [[John is not any doctor]]
 $= \neg_{\text{contrastive}} \forall D'_{(i)} [j \in D_0 \ \& \ D_0 \subseteq D'_{(ii)}] [\text{doctor}(j) \ \& \ j \in D'_{(iii)}]$

従って、対照的否定がかかった場合に、与えられ得る意味表示は、それぞれ次の(i)～(iii)である。

(40) (i) $\neg_{\text{contrastive}} \forall D' [j \in D_0 \ \& \ D_0 \subseteq D'] [\text{doctor}(j) \ \& \ x \in D']$

(ii) $\forall D' [j \in D_0 \ \& \ \neg_{\text{contrastive}} (D_0 \subseteq D')] [\text{doctor}(j) \ \& \ j \in D']$

(iii) $\forall D' [j \in D_0 \ \& \ (D_0 \subseteq D')] [\text{doctor}(j) \ \& \ \neg_{\text{contrastive}} (j \in D')]$

(i) は「D₀より大きい全ての個体領域の中に、

⁹ 対照的集合の成員は、文脈によって変化する。しかし、ここに挙げたものは、「電気スタンド」や「爪」のようなものより、「犬」の対立候補となりやすいという直観は共有されるだろう。

医者であるジョンが存在するわけではない」という意味を、(ii)は「 D_0 より小さいあらゆる個体領域の中にも、医者であるジョンが存在する」ということを、(iii)は「 D_0 の中のみ医者であるジョンがおり、 D_0 より大きい領域の中には医者であるジョンは全く含まれない」ということを意味する。このうち、(i)と(iii)は式の内部で矛盾を生じる。まず(i)の式は、真の命題を否定する。 D_0 の中に医者であるジョンが存在するなら、 D_0 を含んでそれより大きい全ての個体領域 D' にも必ず医者であるジョンが存在する。これは、定義より真が導かれる。(i)はこれを否定してしまう。また(iii)では、一方では D_0 には医者であるジョンが含まれると述べ、一方では、 D_0 を含む個体領域 D' では医者であるジョンは含まれないと述べているため、矛盾をきたす。ある個体領域において医者であるジョンが含まれているならば、その個体領域を含むあらゆる個体領域において、医者であるジョンは含まれるからである。ゆえに、対照的否定文の意味として適切なものは(ii)のみということになる。(ii)はさらに次のように書きかえることができる。

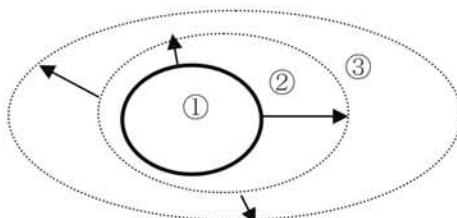
$$\begin{aligned}
 (41) \quad & [[\text{John is not any doctor}]] \\
 & = \forall D' [j \in D_0 \ \& \ \neg_{\text{contrastive}}(D_0 \subseteq D')] \\
 & \quad [\text{doctor}(j) \ \& \ j \in D'] \\
 & = \exists x \forall D' [x \in D_0 \ \& \ D_0 \supset D'] \\
 & \quad [\text{doctor}(x) \ \& \ x \in D' \ \& \ [j=x]]
 \end{aligned}$$

この式では、領域拡張とは逆の領域縮小が起こっている。領域拡張の場合には、領域は中核的事例がから周辺的事例へと拡張することが暗黙に想定されている。領域縮小は、その逆に、周辺的事例から中心的事例へと領域が縮小していく。次節では、領域縮小について検討する。

3.3 領域縮小

領域拡張は次のようなイメージによって捉えられる。

$$(42) \text{ Any owl hunts mice.}$$



any が用いられることにより、健康なフクロウだけでなく、弱っていたり病気のフクロウも含まれるよう領域を拡張していくのが領域拡張である。ここでは、より小さい領域①には、ネズミをとるフクロウとしてより中核的事例が含まれ、領域②、③と広がるにつれ、徐々により周辺的事例が含まれていく。一方、領域縮小は、その逆に、より周辺的事例が含まれる③から①へと進んでいく。(41)の意味表示によると、もっとも小さく縮小された領域でもジョンが医者であることが成り立つと述べているが、もっとも小さく縮小された領域とはどのような領域であるのか考える必要がある。

(42)で示したように、領域が拡大するにつれ事例の周辺度が上がるというように個体が分布しているとすると、最も小さく縮小された領域とは、最も中核的な事例である。(41)の例で考えると、最も医者らしい医者である。最も医者らしい医者というのがどのような医者を指すのかは、文脈によって異なる。医者をも人の苦しみを取り除くことができる素晴らしい職業だと考えられている文脈では、「医者の中の医者」というのは最も人の苦しみを取り除く素晴らしい医者ということになる。しかし、不健康な人間とばかり日々向かい合う不健康な職業であると考えられている文脈では、最も不健康にまみれた医者ということになる。また、昼夜なく仕事に励みかつ立派な趣味も持ち人間的に完璧な医者が、医者の中の医者だと考えられている場合には、そのような理想像が医者の中核的事例となる。このように、中核的事例は文脈に応じて異なる。

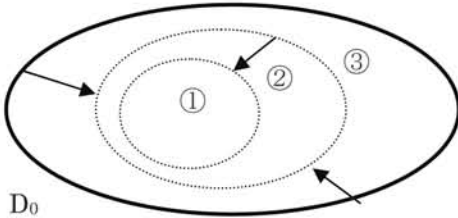
領域拡張の場合にも同様の文脈依存性はあられる。Kadmon & Landman (1993)でも指摘されているように、(42)での起こる領域拡張は、「ねずみを狩る」という述語が最もよくあては

まるフクロウ、つまり元気で健康なフクロウを中核的事例とし、より述語があてはまりにくいフクロウ、つまり体力のない弱いフクロウを周辺の事例とする尺度に沿って起こる。この尺度は、文脈依存的であり、any owlの意味だけでは決定されない。しかし、どのような尺度で集合内の個体が分布するのかが文脈に依存して決定されることは、その意味の中に組み込んでおく必要があるだろう。

- (41) [[John is not any doctor]]
 $= \exists x \forall D' [x \in D_0 \ \& \ D_0 \supset_{c-scale} D']$ [doctor (x) & x \in D' & [j=x]]

「 $\supset_{c-scale}$ 」は、集合の包含関係が文脈によって与えられる尺度に沿って順序づけられることを表す。特別に文脈が与えられない場合には、通常、医者是人助けをする素晴らしい職業であると考えられているので、 D_0 とそれに含まれる D' は、人助けをする素晴らしい医者である順に、 D_0 から小さい個体集合へと並ぶ。

- (43) John is not any doctor.



上の図で、領域③には、人助けをする素晴らしい医者という観点からは、あまり当てはまらない周辺の事例が含まれ、領域②、①へと小さくなるにつれ、よりそれが良く当てはまる中核的事例が含まれていく。(41)は、ジョンが医者の中の医者であることを表すが、これを具体的な文脈にあてはめて、人助けをする医者を中核事例とするならば、(41)は、ジョンが最も人助けをする（能力、実績等がある）特別に素晴らしい医者であることを意味する。これは、適切に英文の意味を捉えている。

4 まとめ

不定名詞句が動詞の目的語位置等に現れる場合、否定文では any N を用いることで対応する否定の意味が表される。それに対して、コピュラ文の補語位置で any を用いて否定文を作ると、対応する肯定文を単純に否定する文にならない。本論文では、「John is not any doctor.」という文が持つ「ジョンはただの医者ではない（特別な医者だ）」という解釈が、どのように得られるのかを検討してきた。そのためにまず、この文に含まれる any の解釈と否定の種類について次の点を明らかにした。

- (44) (i) 問題となる any は、自由選択項目としての特性も否定極性項目としての特性も完全には持たない。
 (ii) 不定名詞句の意味と領域拡張の意味を持つ。
 (iii) 問題となる否定文の否定は、対照的否定である。

以上の点から、「John is not any doctor.」では、any に対照的否定がかかり、any の持つ領域拡張とは逆の領域縮小が起こる結果となり、これが「ジョンは特別な医者だ」という解釈を導くことを主張した。すなわち、より小さく、より中核的なあらゆる事例において「ジョンは医者である」が成り立つので、ジョンが周辺の医者個体でないという意味が得られる。

本稿では、一つの文だけを分析の対象としたが、同じ構造を持つ他の文にも、ここでの分析はあてはめられる。

- (45) a. It is *not any* watch, it's a Franck Muller.
 「それはどこにでもある時計ではない。フランク・ミュラーだ。」
 b. This is *not just any* old painting.
 「これはただの古い絵ではない。」

また、ここで提案した any の分析が not (just) any 以外で用いられる any の解釈も適切に捉えられる点についても、ここで触れて

おきたい。領域拡張の意味を any に想定することで、自由選択 any も否定極性文脈で用いられる any の解釈も適切に捉えられることは、Kadmon & Landman (1993) でも示されている通りである。本稿では、any の意味に全称量化子を含めている点が異なっているが、名詞述語の導入する変項 x の量化は、モーダルや総称演算子が文に含まれるか否かに依存するという柔軟性を持たせることにより、否定極性 any も自由選択 any の解釈も捉えられると考えられる。例えば、(5)' a には次のような意味表示が与えられるだろう。

- (5)' a. I don't have **any** cat.
 $= \neg \exists x \forall D' [x \in D_0 \ \& \ D_0 \subseteq D'] [\text{cat}(x) \ \& \ \text{have}(I, x) \ \& \ x \in D']$

(5)' a では x が存在量化を受けているが、これは、文がモーダル演算子や総称演算子を含まないエピソード文であり、存在化閉包がかかると想定していることによる。この式は、「発話文脈から与えられる個体領域 D_0 の中にも、 D_0 を含むすべての個体領域の中にも、私に飼われている猫が存在しない」ことを表す。

次のような自由選択 any の意味にも適切な分析を与えられる

- (6)' a. [[Any owl hunts mice.]]
 $= \text{Gen } x, s [\text{owl}(x, s)] [\forall D' [x \in D_s \ \& \ D_s \subseteq D'] [\exists y [\text{mouse}(y) \ \& \ \text{hunt}(x, y, s) \ \& \ x \in D']]]$

この文は総称文であるので、総称演算子 Gen が働く。Gen は個体だけでなく、状況も量化するため、個体変項 x と状況変項 s を束縛する。意味は、「 x が s においてフクロウであるなら、 x を含む s に与えられる個体領域 D_s を含む全ての D' について、 x は D' に含まれかつ s においてネズミをとる個体である」となる。 D' が健康—不健康の尺度に沿って拡張していく個体領域とすると、 D' に含まれるフクロウ x は、拡張した D' に含まれていくにつれ、弱っ

ていて餌を取らなそうなるフクロウになっていく。こうして、any N 総称文の意味を適切に捉えることができる。

ただし、any の意味解釈が全ての文脈において適切に捉えられることを確認するためには、量化詞上昇 (Quantifier Raising) のような統語操作や関係節を始めモーダルや命令文の意味論を明示した上で、その相互関係を明らかにする必要がある。これらの点については今後の課題としたい。

最後に一つ、ここで提案した分析の問題となる点について触れておきたい。このような例において現れる否定が対照的否定であるとするなら、対応する肯定文が想定されていなければならない。つまり、通常通りいくなれば、「John is not any doctor.」で対照的否定がかかっている場合、対応する肯定文「John is any doctor.」が想定されているはずだということになる。これは、想定された肯定文を拒否するのが対照的否定であると考えられているためである。しかし、「John is any doctor.」は不適切である。現段階で考えられることは、対応する肯定文が不適切である理由が、否定文に置かれることにより解消されるために、肯定文と否定文とで容認度に違いが現れるのではないかということである。「John is any doctor.」が用いられないのは、わざわざ不定名詞句に代えて any N を使用しているにもかかわらず、情報量を増やさない文を作り出してしまうためであった。否定文に置くことにより、情報量のより多い命題を作ることができるようになる。否定文に置くということ自体が、容認度の差を作り出しているため、例外的に想定される肯定文が不適切である対照的否定文が存在するのではないかと思われる。

References

- Carlson, Gregory 1981. Distribution of free choice *any*. *Proceedings of the Chicago Linguistic Society* 17, 8-23.
 Chierchia, Gennaro 2006. Broaden your views: Implicatures of domain widening

- and the "logicality" of language, *Linguistic Inquiry* 37(4), 535-590.
- Dayal, Veneeta 1998. *Any* as inherently modal. *Linguistics and Philosophy* 21-no.5, 433-476.
- Dayal, Veneeta 2009. Variation in English free choice items. Draft of *Proceedings of Glow Asia VII*, 2008.
- Horn, Laurence R. 2000. Pick a theory (not just *any* theory): indiscriminatives and the free-choice indefinite. In L. R. Horn & Y. Kato (Eds.), *Negation and Polarity: Syntactic and Semantic Perspectives* (pp. 147-192). Oxford: Oxford University Press.
- Horn, Laurence R. 2001. *A Natural History of Negation*. Chicago: University of Chicago Press. (originally published: Chicago: University of Chicago Press, 1989).
- Jespersen, Otto 1917. Negation in English and other languages (Trans.). Kobenhavn: Bianco Lunos Bogtrykkeri.
- Kadmon, Nirit and Fred Landman 1993. *Any*. *Linguistics and Philosophy* 16, 353-422.
- Kratzer, Angelika and Junko Shimoyama 2002. Indeterminate pronouns: the view from Japanese.
<http://semanticsarchive.net/Archive/WEwNjc4Z/>.
- Ladusaw, Williams A. 1979. *Polarity sensitivity as inherent scope relations*. Ph.D. dissertation, The University of Texas.
- Menéndez-Benito, Paula 2010. On universal Free Choice items. *Natural Language Semantics* 18, 33-64.
- van Rooij, Robert 2008. Towards a uniform analysis of *any*. *Natural Language Semantics* 16(4), 297-315.